

記念碑
創造の歴史と人間のモニュメント

カラー写真構成

お木太風は記

太田



本島虎太

朝雲久見臣

未来歴史の人物像

歴史はつねに時間を遡っていく。 科学はつねに未来を追っている。



人間はこの二つの背反する時間の中で生きている。わずかに現在という短かく不安定なモメントが接点となつてはいるが、歴史と科学の時間のギャップはとてつとせそうにない。

しかし、視点を変えて歴史の未来という問題が考えられないだろうかと思う。歴史が人間ときり離せない学問であるとするれば、現在の人間が未来の歴史に登場する資質や資格をもつことは理解してもらえらるであろう。つまり、やがて時間の経過が歴史の正常なページに姿を現わすことになるわけだ。

本島虎太は未来歴史に登場する資質をもっている。彼の生いたちや先祖、それも比較的近い系累をたずねただけでも、郷土史に名を留める人達がいく人もいる。そうした背景をもった本島虎太が、生粋の太田人として三六才という若さで第四代の太田商工会議所会頭に就任する。ときに昭和三十七年。アメリカでケネディがニューフロンティア・スピリットを掲げて大統領に就任したので一九六三年一月（昭和三十六年）その翌年であった。「たいまつは渡された」という有名な大統領就任演説に日本国内はわいていた。「東のケネディ、西の本島」と期待される要素が内外ともに生れていたであろう。

本島虎太、大正十五年十二月生れ、旧制第五高等学校（熊本）卒業、長崎医大入学、病

気のため本島病院へ帰る。会頭就任後十三年有余、青年会頭は五十才になんなんとしていて。その果たしてきた仕事の数々はここでは省かせていただく。商工会議所の記録がそれを埋めてくれるだろうから……。

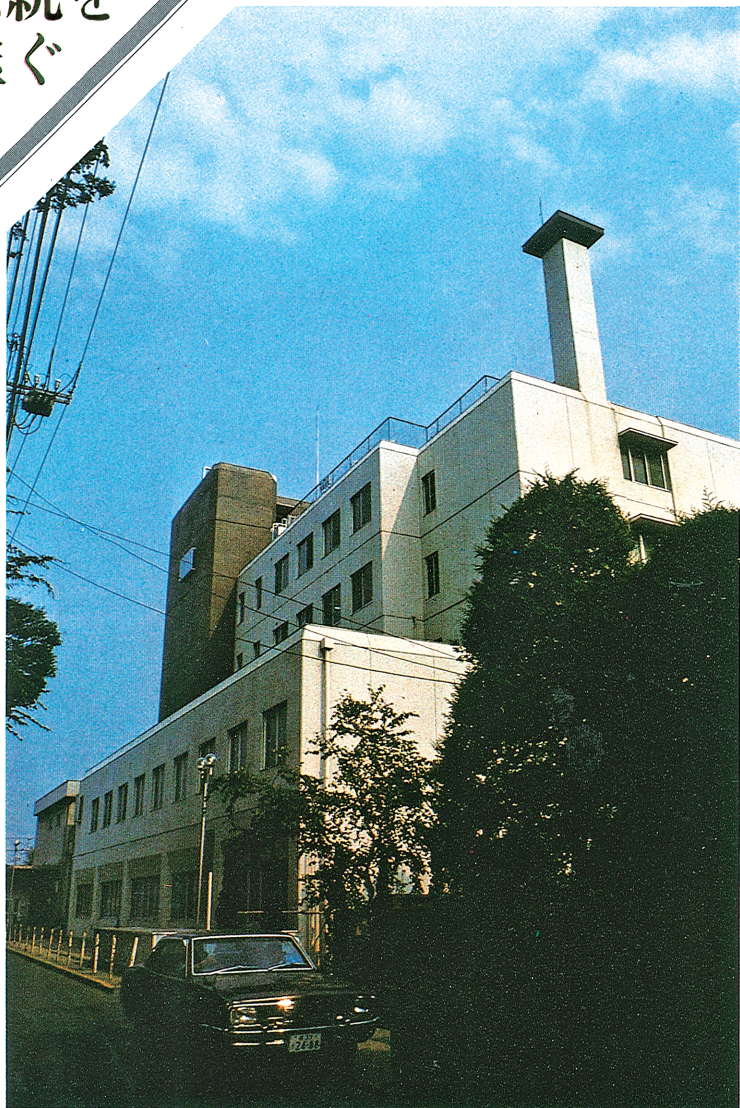
未来歴史の対象になる人間のパスポートはおよそ次のようになろう。

①創造的なことからの初の企画者であること。
②自分の生きかたに妥協を許さないこと。

そのほかいくつかの条件はあるが、この二つが最重要である。これまでの歴史に登場する人物のパターン、即ち動機・推進・結果のそれぞれ別のセクトごとの人物評価は未来歴史では興味を持たない。そうみなながら本島虎太の一連の思考を探ることは意義がある。

新しい都市作りはどうしたらよいか。近代経営、商店街作りはどうあるべきか。大型店の進出にともなう対策をどう考えるか。会頭としてこの課題はきわめて重要である。「太田は富が低い。市民は富まなければならぬ、その富は物資的意味だけではない。文化的、教育的な富の蓄積も意味している。」「医学の倫理が叫ばれているが、商業にもルールがある。商売のルールを大切にしたい。産業の倫理は時代とともに変わるものだと思っている。」「良識と知性を持ち産業と学問が一体となつて町を豊かにしていく。地域社会とのつながりをもつことが産業を伸ばしていくことになり」と本島虎太は述べる。そしてかつては主流であったドイツ医学が、今はアメリカ医学に主流を譲つていくという。アポロ計画に象徴される宇宙科学がそうさせたのだと説く本島虎太は「文化の程度は富の高低に左右される」という新説を唱える。過去の歴史が証明しているというこの説の当否は別に、一つの見方であることは疑いない。商工会議所は能力を売るところ」という考え方も余り聞かない説と私は思った。どうやら本島虎太という人間の未来歴史に登場するエレメントはそろってきているように思った。

（育子夫人と一男二女の五人家族。趣味は読書、小泉信三の「平生の心がけ」田中美知太郎「人生論」を愛読する。「吞舟の魚支流を渉まず」が好きなことばという。）



本島病院の二代

茂木 晃

太田西本町に江戸時代初期より定住し、代々医業を営む本島病院がある。

高祖本島数馬以来、三百六十年余、現当主珪三氏（第九代自柳襲名）まで、十二代の家柄を誇る名家である。ここでは、記録の明らかな明治以来百余年、三代について述べたい。

一、憂国の士柳翁 本島家第九代（自柳六代目）は幼名を英之助、貞庵、号を礼郷とい、天保十一年十一月十三日

父自柳の長男として生まる。資性忠直で新田公、高山仲繩に傾倒し少年時、江戸の昌平塾で幕府教官長谷部謙庵、梁川星巖らに師事した。安政三年十七才の時西洋医学を長崎及び熊本に学び、殊に熊本藩医村井洞雲について研鑽していたが、文久三年、父自柳の死去により帰郷、家業を継ぎ、自柳を襲いだ。明治三十三年隠居して名を柳翁と改めた。

慶応三年維新回転の激流の中、大館謙三郎、金井之恭、太田稻主、黒田桃民、岡田稻雄らと尊王の大義を唱え、新田満次郎を盟主に倒幕の義

旗を揚げようとしたが幕吏に捕えられ数ヶ月間、岩鼻の獄に幽せられてしまった。

東山道総督岩倉具定一行の東下の折、免ぜられ、明治九年、新田満次郎とその同志らと館林町に駐屯する岩倉らに面会して従軍を乞うた所許され、いわゆる新田官軍結成に成功した。兵率百五十名をもって太田口関門守衛を命ぜられ、更に会津兵を追って戸倉口に出陣するなど奮闘し、

明治二年、岩鼻県を経て左の書状一通と「新論」上中二巻を下賜された。『上州新田郡太田町 医師 自柳

其方儀 従来憂国之志篤 神妙之至 依之此品遣候事 己四月 自治制度が整備されると太田町会議員、新田郡会議員、群馬県会議員に選出され、医業のかたわら公職に邁進し地方自治に貢献した。大正十三年十二月十二日没、行年八十五才。法名 英礼院貞山柳翁居士。

二、県会議長 撫一庵自柳 本島家第十代（自柳七代）は幼名を綾三郎、撫一庵と号す。慶応三年六月二十日、埼玉県北埼玉郡今井村、栗原友右衛門の子として出生。後に柳翁の長女乙女と結婚して、本島家の養嗣子となり、第七代目自柳を襲名した。

明治十八年四月、埼玉師範学校を卒業した学校の先生であったが、本島家に入ってから、語学と医学を最初から習ったという秀才で努力家、また人情家であった。明治二十一年医術開業試験にパスして医籍登録されたが翌二十二年、更に進んで東京帝国大学医学専門学校に入り、同二十四年まで、薬物、外科学を修業して卒業し、二十六年三月より本島家で開業した人である。

明治三十四年以来、医業のかたわら、太田町議員に連続当選し、同三十六年からは新田郡会議員にも当選郡会議長にも推された。同年には新田郡医師会長になり、大正七年には日本医師会の群馬県代議員となり永くその職にあった。また、大正期には、県医師会と学校医会の副会長も兼ねている。

大正四年から昭和初めまで三期にわたって県会議員に当選し、県参事会員や県会議長の要職を占め、政友会派の重鎮として地方自治に貢献した。また、大正七年以降は新田銀行上毛実業銀行、県農工銀行、群馬大同銀行の取締役に推されるなど金融

界の大御所でもあった。昭和十四年司法保護常務委員となったが同十七年胃癌発病、ついに十八年十二月二十七日永眠した。行年七十七才。法名 真玄院仁山鶴寿大居士。

三、太田の殿様学者の柳之助 本島家第十代当主は柳之助である。自柳襲名を嫌い至誠一貫学問に精進し、柳之助の名で押し通した。日本における放射線医学と結核の第一人者で長身端麗なジェントルマンで、太田の殿様と町民はよんだ。

明治二十五年十二月十一日、先代自柳と乙女の長男として出生。太田中卒業後、一時文学を志し早稲田大学聴講生となり、永井荷風の薫陶を受けたという。しかし、大正六年には宇都宮歩兵六十六連隊の一年志願兵として入隊し、除隊後は家業を継ぐ決意をして大正八年、東京医学専門学校に入学した。柳之助の医学進

学で、柳翁、自柳ともに安堵の胸をなでおろし大変に喜んだという。大正十一年東京医専を卒業、すぐに順天堂病院外科に入局、同十二年には慶応病院に移って藤浪先生のもとで放射線科助手となり、勉学とレントゲンの研鑽に励んだ。大正十五年渡欧、ベルン大学でドクトル免状をとり、ベルリン大学癌研で学び、

欧州各国を視察して昭和三年に帰朝、すぐに慶応放射線科講師となり同五年学位論文が通って博士号獲得。同六年、母校東京医専放射線科教授に任じられ、多くの研究論文、宿題報告を発表し、斯学の発展と後輩の指導に尽力した。戦後は東京医大理事、東京医学会長を歴任したが、昭和三十二年九月八日惜しまれつつ六十四才の生涯を閉じた。学問一筋の一生であった。法名 本覚院人徳慈円翠柳大居士。